鳥取県立美術館プレイベント

「はじまる。これからの美術館でできること」開催リポート

2023 年 12 月 16 日　鳥取県立博物館　講堂

鳥取県立美術館　×　森美術館　×　鳥取県立博物館

みんなでつくる　わたしたちの美術館

アートのある空間が居場所になる

いよいよ 2025 年 3 月 30 日に開館する鳥取県立美術館。
県立美術館としては日本最後発、日本中にたくさんの美術館があるなか、これからはじまる美術館で何ができるのか。

鳥取県立美術館プレイベント「はじまる。これからの美術館でできること」
～展覧会“シリーズ：美術をめぐる場をつくる Ⅴ”『赤ちゃんたちのアート鑑賞パラダイス』から考える～
と題し、トークイベントを開催しました。

第一部では、今回の企画に参加した一般県民である“プレーヤー＆サポーター※”と、『赤ちゃんたちのためのアート鑑賞パラダイス』担当学芸員、美術館の運営担当者で、これまでのディスカッションと、展覧会について記録と共に振り返り、取り組んでみて分かったこと、良かった点やこれからの美術館に活かせることなどについて考えます。

第二部では、東京・六本木にある森美術館において、ラーニングを企画の根幹に捉え、学びや交流のプラットフォームとしての場づくりをされている白木氏をお招きし、鳥取県立美術館　館長予定者尾﨑、学芸員佐藤と、「美術館における学びとは」「アートのはたらき」「美術館と地域のかかわり」などについてクロストークを行い、これからの“美術館でできること”を考えます。

イベントの進行を務めてくださったのは、日本海テレビ　アナウンサー　小林　沙貴さん。
第一部は　鳥取県立美術館プレーヤー＆サポーター　櫻井　重久さん・谷田　明香さん、
そして鳥取県立博物館　専門員兼学芸員　佐藤　真菜、鳥取県立美術館パートナーズ　運営担当　長尾　和栄の座談会です。

※プレーヤー＆サポーター：一般公募で集まったメンバーで、アイデアをカタチにしたり、展示物の制作や設置などをサポートしたりしていただく「みんなでつくる」鳥取県立美術館の活動です。 2023 年鳥取県立博物館で開催された展覧会の展示物制作やワークショップの企画運営にご参加いただきました。

「自分たちの美術館として愛着ある場所に」

「平井知事から 2025 年 3 月 30 日開館が発表されました。鳥取県立美術館についてお聞かせください。」

（長尾）倉吉未来中心やなしっこ館のある倉吉パークスクエアの一角に位置します。南側には広大な国指定の史跡大御堂廃寺跡が広がり、えんがわ・ひろま・テラスや、彫刻広場など屋外にもアートが展示されていたり、解放感あふれる明るい美術館です。展示室以外は無料で入館でき、いつでもアートのある空間で時間を過ごしていただけます。作品を楽しみたい人はもちろん、カフェやテラスでくつろぎたい人も、まさにお家の縁側や広間のようにたくさんの方が集う場所になればうれしいです。また、「みんなでつくる」「未来をつくる」美術館でありたいと考えます。一般の皆さまに美術館づくりにご参加いただくことで、自分たちの美術館として愛着ある場所となり、活動を通してみんなの心に何かが芽生える場となればと思います。

「会場に熱が出る、熱が生まれる」

「教育普及をテーマにした展覧会について教えてください。」

（佐藤）鳥取県立博物館では 10 年以上にわたり年に 1 回、教育普及的展覧会を開催しています。いろいろな作家さんにご協力いただくことも多く、例えばワークショップで制作した作品を展示したり、展示された空間に働きかけるようなしかけを作ったりしてきました。光や音、ダンスなどいろいろなものと出会える展示がコンセプトです。

今回の「赤ちゃんたちのためのアート鑑賞パラダイス」を思いついたきっかけは、「子どもと美術館」をテーマにした対話会で、「ここで話し合ったことはかたちにはならないんですよね」という含みを持った発言をされた方がいらっしゃったことです。その時「必ずかたちにしたい」と思い、「子どもと美術館」のコンセプトを練るとともに「皆さんといっしょに展覧会を作っていく」と決意しました。

今回プレーヤー＆サポーターの皆さんと協働することで、「可能性がこんなにも広がるんだな」と思いました。

また、抽象的な言い方になりますが「会場に熱が出る、熱が生まれるんだな」と実感しました。

「この人たち本気だな」

「実際プレーヤー＆サポーターとして参加されていかがでしたか。」

（プレーヤー＆サポーター　櫻井さん）私は鳥取市内の病院に勤務する医師です。健康について考える上で人々の社会的なつながりや関係性がその地域の健康寿命に関係するというデータがあります。参加した背景は、総合診療医として社会的なつながりを形成する場がほしい、と日頃から考えている中でアートが「健康とは何か」を捉え直すきっかけになるのではないか、社会にとっての大事なつながりにアートが介在してくれるのではないか、という思いがありました。それを実行に移す手段を探していたところにこの新しい美術館の企画をSNS で見つけ関わってみようと思いました。実際やってみて運営の方々の熱意や場づくりが本当にすごいな、と思いました。
佐藤さんの話にもありましたが、人の話を聴く、それをちゃんと実行に移す姿を見て、「この人たち本気だな」と伝わってきました。僕たちも心理的安全性が保たれた中でいろいろな取組を行うことができたと思っています。ですからこれからもこの取組に関わっていきたいな、と思います。
「美術館を健康や医学的な切り口で見る、という参加の仕方もあるのですね。」

「みんなのちからで想像を超える」

「もうお一方、プレーヤー＆サポーターの谷田さんです。」

（プレーヤー＆サポーター　谷田さん）わたしは建設中の美術館の近くに住んでいて、娘たちも大きくなり子育てもひと段落しました。もうすぐ美術館もオープンだな、とホームページを見ていたらこの取組がありちょっと興味が湧いて参加しました。学生のころから学芸員にあこがれていたので、自分が出したアイデアがかたちになって「みんなに喜んでもらったら素敵じゃない」と思ったのがきっかけです。最初の打合せで集まったのが少人数、開催まで短期間、「ほんとにこれできるの？」と正直思いましたが、そこで自分がどうやったら貢献できるかを考えました。とにかくマンパワーが必要と感じ、「人なら集められる」と友達に連絡をし最終的には 10 人くらいの友達が携わってくれました。距離的にも時間的にもなかなかみんなが参加するのが難しいので、自宅に呼んで作業を行ったこともあります。
プレーヤー＆サポーターによる企画・主催のワークショップでは、次々にみんなのアイデアが盛り込まれ、自分の想像を超えるワークショップができたと思っています。子どもたちや来場者の方々の笑顔が会場にあふれて、会場いっぱいが温かい雰囲気に包まれ「やってよかったな」と思った満足感のあるひと時でした。
こうして、勇気を出して参加したことによって、私自身も素敵な人たちに巡り会えたし、今までの日常生活にはない経験ができたと思います。緊張してガクガクしながら、仲間と一緒にいい経験ができたのも、学芸員さんや運営の方たちが「無理がないように」といつも配慮してくださったおかげだと思います。こうやってプレーヤー＆サポーターの気持ちが集結したかたちで盛り上がったイベントだと思っています。
「谷田さんは自分で輪に参加されるだけでなく、輪を広げる活動をされたということですよね。」
（谷田さん）「みんな来て」って言ってお茶飲みながらみんなでワイワイやりました。
「素敵なかかわり方ですね。」

「特別の価値がある、わたしの居場所」

（小林アナウンサー）
ほかにも、今回会場にはお越しになれなかったプレーヤー＆サポーターの方のお声もいただいています。

女子高校生で参加された方は「自分が作った作品で小さい子と触れるよい経験となった。」と話されます。

読み聞かせを提案した方からは「読み聞かせがやりたい」と言ったら周りからどんどん、ピアノの伴奏やお絵描きワークショップのアイデアが出てきて、最終的に出来上がったものは自分の想像をはるかに超えていた。自分たちを信じて自由にやらせてもらえ、自分の自信になった。」との声がありました。 活動をクリエイティブなことへの挑戦の場として活用されたと言えるかも知れません。
普段お仕事をされていて現在育休中のため気分転換にと参加された方は「この活動に参加してから、夫に急にすごくイキイキとしてびっくりした。と言われた。自分にとってこの活動は特別の価値がある、わたしの居場所になった。」と話されました。
またプレーヤー＆サポーターの中には企画や制作のほかに撮影・映像編集のご担当の方もいらっしゃいます。本日の会場のカメラマンの山本さんです。「皆さんが生き生きと活動する様子を撮影しながら、その人を想像するのが楽しくて、写真を撮っていても自然に、勝手に撮りたい気持ちになってどんどん引き込まれていました。いい時間でした。」とコメントいただいています。
いろんな視点を持った人が集まるというのは魅力的ですよね。」

「展覧会会場設営準備の現場に赤ちゃんが」

（小林アナウンサー）わたしもこの展覧会をニュースで取材させていただきました。「一般の方の参加によっていろいろ展示が変化する展覧会があるらしい」と聞き、学芸員が緻密に選びこだわって仕上げる展覧会が、普通の人の意見でどんどん変わるものなのかと驚きました。
また、「0歳～5 歳を対象にした美術展」とは？ということも取材のきっかけの一つでした。
取材してみると、赤ちゃんは赤ちゃんなりの鑑賞方法があると知りました。遊びが中心の展覧会を想像していたのですが、赤ちゃんがアート作品を食い入るように観たり、ちゃんとしゃべれなくても何かを伝えようとしていたりと、興味深いものでした。来場者の方のインタビューでも「子どもが飽きてしまうと思っていたが楽しめました」「意外と子どもが作品を観ていることがわかりました」という声がありおもしろかったです。
展覧会開催1週間前の会場設営準備を取材したときに、会場の準備段階から赤ちゃんが参加していてまた驚きました。

プレーヤー＆サポーターのお子さんにも協力いただき、実際にその展覧会会場で遊んでもらい、どういうものに興味があるのか、赤ちゃんにとって危険な箇所はないかなど、試行錯誤を赤ちゃんと一緒にするということが新鮮でした。

「みんなで作っていくということによる場の空気が、展覧会自体の空気感や熱量をつくっていく」

「櫻井さん、谷田さんは具体的にどのように展覧会準備に参加されましたか？」

（プレーヤー＆サポーター　櫻井さん）主に展示室の演出物の制作を行いましたが、仕事があり活動の時間が合わない時は、LINE グループの中でみんなで議論するなどして参加しました。
また、わたしは助産師の知り合いがいたので声をかけて、会場にいらっしゃるお父さん・お母さんと子育てのお話をしていただいたりしました。
（プレーヤー＆サポーター　谷田さん）わたしは展示室の演出物の木をいっぱい作りました。

「赤ちゃんがぶつかっても危なくないようにやわらかい素材でコーティングする工夫がありましたね。」
（プレーヤー＆サポーター　谷田さん）制作にはとても時間がかかるので、たくさんの友達や、時には娘にも協力してもらいました。

「佐藤さん、プレーヤー＆サポーターさんの活動についてどのように感じられましたか？」
（佐藤）展示室の設えを試行錯誤するときに、プレーヤー＆サポーターさんのお子さんを「まほちゃん先生」と呼び、楽しそうだったら採用、つまらなそうだったらやめる、危険そうだったら考えよう、など参考にさせてもらいました。やはりこういう作り方はいいなと感じました。最初は子どもが小さいので、と Web で参加されていたのですが、ぜひお子様もごいっしょにとお伝えしたら「今から行きます！」と子ども連れでご参加いただきました。ほかの参加者の方も次第に旦那さんにも制作物を運んでもらったり、高校生の娘さんも気が付いたらプレーヤー＆サポーターになっていたりと、活動の輪が広がっているのを感じました。

「プレーヤー＆サポーターの方が参加された効果をどのように捉えていますか？」
（佐藤）谷田さんがおっしゃったように当初「間に合うんですか？」というプレーヤー＆サポーターからの本気の問いがありました。確かに私達だけでは間に合わなかったと思います。谷田さんはご自宅にお友達を呼ばれたときにカレーを用意し、夕飯をふるまって皆さんで制作してくださったとお聞きしています。時間的にもとても助けられました。
みんなで作っていくということによる場の空気が、展覧会が始まる前から作られていくような感覚があり、それが大事だったな、と感じます。
「展覧会が始まる前から空気感が醸成されたということなんですね。」

「できる範囲でそれぞれの力を持ち寄る」

（佐藤）また今回間に合わなかったのですが、櫻井さんにご紹介いただいた助産師さんと話し、今後は妊婦さんの鑑賞会等も行いたいと思っています。妊婦さんとそのパートナーが会場にお越しいただいた際、赤ちゃんもおなかの中で観る、そこからまた次の展開があるということを気づかせていただきました。

「普段関わりのない皆さんが何人もいらっしゃるという中で苦労された点や気を付けた点はありますか？ 」

（佐藤）気を付けたのは、わたしがあまり「できます。できません。」ということを言わないようにしたことです。まずは参加されている方のアイデアを聞かせていただく方がいいな、と思っていました。

「参加されていたお二人は心がけていたことや大変だった点はありますか？」

（プレーヤー＆サポーター　櫻井さん）とてもいい場を作ってくださっていたので、アイデアを出したらみんなが考えてくれてかたちになってる、という感じで「これできるかな？」とかあまり気にせずにアイデアを出していた雰囲気がありました。

またどうしてもみんなそれぞれ仕事や生活スタイルがあるので、ミーティングの時間の都合が悪くても「いいですよ」と言ってもらえたのが良かったです。できる範囲でそれぞれの力を持ち寄ることができました。

「どんどん進化していく展覧会」

「実際展覧会が始まってから、会場にいらしたお客様の声でブラッシュアップされた部分もあるんですよね。」

（佐藤）はい、小学三年生の団体を受け入れて対話鑑賞を行った際、「赤ちゃんのためになるアイデアはある？」と聞いたところ、「この台は高すぎるから補助の台を付けたほうがいい」「紙コップあそびのコーナーをもっとカラフルに芸術的にした方がいい」などとても鋭い意見をいただき、聞いたその日の夜に改善しました。紙コップには色のシールでカラフルにしたのですが、赤ちゃんは必ずそのシールを貼ったものから手に取って遊んでいました。子どもにウケるものは子どもがよく知っているんだな、と思いました。そのようにどんどん進化していく展覧会になりました。

「プレーヤー＆サポーターだけでなく、本当にいろんな方が参加する展覧会だったんですね。他にも来場者の方の反応はいかがでしたか？」

（佐藤）子どもにケガがないように楽しんでもらうということを一番に考えていたので、会期中にケガがなく良かったのですが、もう一つ、保護者の皆さんの表情がとても安らいでいて、ゆったりと遊んでおられる様子が、とても印象に残りました。

普段の生活の中では「これはだめ」とかどうしてもいろいろな制約があるんだろうなと感じました。

「アートのある空間が居場所になる、そんな場所が必要とされている」

「インタビューをしていても「小さい子を連れて展覧会を観に行くと迷惑じゃないか」と心配で、親御さんもなかなかアートに触れる機会が少ないというお声がありました。お子さんだけでなくお父さんお母さんにとっても居心地のよい場だったのではないでしょうか。」

（佐藤）「みんなのこえ」というかたちで感想を書いていただいたのですが、「親子連れで来ていいところなのだとわかりました」「来てよかった」と書いてくださった方がたくさんいました。

一方で失敗もありました。よかれと思い、ベビーカーを移動しやすいように階段にスロープを設置したのですが傾斜がきつく、赤ちゃんを乗せたベビーカーや車いすの方が使われると危ないことがわかり、すぐに撤去しました。

「そうやって決まったものを提供するままではなく、少しずつかたちをかえられる、というのもこれからの美術館には大事なんですね。」

（佐藤）当事者の人の話を聴いてつくる、本当の声を聴く、ということが意外とできていないと痛感しました。当事者の意見を聞き、だめなことは改めるということをやっていかないといけないと思います。

「今日の会場のエントランスにも、来場者に書いてもらったたくさんのお声が貼られていますね。」

（佐藤）もっとお叱りの声もあると思っていましたが、「この展覧会をもっと続けてほしい」「常設してほしい」という声をたくさんいただきました。アートのある空間が居場所になる、そんな場所が必要とされているんだな、と思いました。

「自分の人生にとってもなにかのプラスになると感じてくださるような活動を」

「今回の活動をこれからの新しい美術館にどのように活かしていかれますか。」

（佐藤）これはスタートだと思っています。失敗してもどんどん改善して、新しい美術館もみんなでいっしょに作っていけばいいと思いました。最初から完全なものができるとは思っていません。新しい美術館ができても、自分の人生にとってもなにかのプラスになると感じてくださるような活動を、わたしたちも心がけて取り組んでいきたいと思っています。

また、アート・ラーニング・ラボを起点として県内の小学校４年生を全員美術館に招待します。小さい県だからこそ、「県内全員の子どもが必ず美術館に行った経験を持つ」ということを実現できると本気で思っています。

他にも多様なニーズに応じた展示やワークショップ、鑑賞の機会を作っていきたいと思います。

「しあわせとはなにかを考えたり捉え直したりできるツールとしての機能」

「櫻井さんは、新しい美術館が完成したらどのように関わっていきたいと思われますか？」

（プレーヤー＆サポーター　櫻井さん）個人的には今回参加してすごく楽しかったので引続き関わっていきたいと思っています。

医療者としては美術館がつながりの場であったり、健康とはなにか、しあわせとはなにかを考えたり捉え直したりできるツールとしての機能を発揮できることに期待しています。

「谷田さんは新しい美術館に期待することはありますか？」

（プレーヤー＆サポーター　谷田さん）世代を超えた人たちのコミュニティの場所となることや、暮らしの中に美術館がある、そんな身近な施設になってくれたらいいなと願っています。

暮らしの一つとして美術館を選択してもらうということも課題になりますね。県立美術館の開館が楽しみになってきました。
みなさまもぜひ鳥取県立美術館にいろいろなかたちでご参加いただければと思います。

第二部は、森美術館　アソシエイト・ラーニング・キュレーター　白木　栄世さん、
鳥取県教育委員会事務局美術館整備局美術振興監　尾﨑　信一郎（美術館館長予定者）、
そして第一部に引続き鳥取県立博物館　専門員兼学芸員　佐藤　真菜によるトークセッションです。

白木　栄世（しらき　えいせ）／ 森美術館　アソシエイト・ラーニング・キュレーター
熊本県熊本市生まれ。2006 年武蔵野美術大学大学院修了。2003 年より森美術館パブリックプログラム・アシスタントとして勤務。2017 年より現職。森美術館の展覧会に関連するシンポジウム、ワークショップ、アクセスプログラム、学校プログラムなど、ラーニング・プログラムの企画・運営を行う。

尾﨑信一郎（おさき・しんいちろう）／ 鳥取県教育委員会事務局美術館整備局 美術振興監
1962 年、鳥取市生まれ。大阪大学大学院芸術学研究科博士課程修了。兵庫県立近代美術館、国立国際美術館（大阪）、京都国立近代美術館でキャリアを重ねた。2021 年に鳥取県立博物館館長、22 年から県教委美術館整備局美術振興監。専門は現代美術。鳥取県立美術館館長予定者。

「途切れることなくつながっていく、ということが貴重」

（白木さん）森美術館は 2003 年に開館し、ちょうど今年 20 周年を迎えました。この 20 年間どのようなプログラムを行ってきて、「学びの場所としての美術館」とは何か、その試行錯誤を共有できればと思います。
【第一部】でも、たくさんのお子さんの写真が投影されていましたが、わたしからも森美術館で撮影した印象的な写真をご紹介します。
これはプログラム参加者であるお子さんの写真です。そしてもう一枚、青年が写っている写真ですが、先ほどのお子さんが成長された姿がこの青年です。
この方は2～3歳の時に森美術館に来てくれて、17 歳になった今、森美術館の館長室で 20 周年記念のインタビューを受けてくれました。お母さんのおなかの中にいる時からわたしたちの美術館のファミリーアワー「おやこでアート」というラーニング・プログラムに参加してくれて、以来毎年、毎展覧会に来てくれました。一時期海外に住まれた期間やコロナの期間がありましたが、美術館に足を運ぶことができなかった時期も、オンラインで参加いただきました。途切れることなくつながっていく、ということが貴重だと思います。

「暮らしの中に美術館がある」

わたしたちの森美術館は東京の六本木ヒルズにある森タワーというビルの 53 階にある、民間企業の経営による美術館です。
わたしたちも「暮らしの中に美術館がある」ということを大切にしていて、開館時よりミッションとして「アート＆ライフ」というキーワードを掲げています。生活の中のあらゆる場面で多くの人がアートを楽しめる豊かな社会、その社会に森美術館の活動が貢献できるのではと考えます。その貢献の方法として、森美術館は現代アートで表現することを使命とし、現代性・国際性をミッションに活動を行っています。2020年に就任した 3 代目館長の片岡真実は、就任メッセージの中で「ラーニング・プログラム」をひとつのテーマとしています。現代アートというのは社会を映し出す縮図であり、それを来館者やプログラム参加者に共有するために、「ラーニング・プログラム」によってどのように展覧会やプログラムが作り上げられるのかを伝えたいと考えています。

「美術館とは誰のものなのか、美術館の存在意義とは何か」

ではラーニングとは何か。わたしたちは開館当初は「ラーニング」ではなく「パブリック・プログラム」という言葉を使っていました。
現在の「ラーニング」になったきっかけが東京オリンピック・パラリンピック開催でした。たくさんの人が東京を訪れるときに、美術館としてどんなアプローチができるかを考えました。そこでロンドンオリンピック・パラリンピックが開催されたイギリスの美術館のリサーチを行い、美術館としてどんなことを行ったのか、オリンピック・パラリンピック開催によりどんなことが起きたのかを調べました。やはりスポーツ関連のイベントが盛んになり、イギリスの現代アートの美術館TATE（イギリス政府の持つイギリス美術コレクションや近現代美術コレクションを所蔵・管理する組織。ロンドンなど各地にある国立の美術館を運営。）などの国立美術館でも、美術館に関する予算が削減されるということが起こりました。
世の中がそんな雰囲気になっていく中、「美術館とは誰のものなのか」「美術館の存在意義とは何か」を考え、「ラーニング」という言葉に行きつきました。
Victoria and Albert Museum には「誰にでも子どもの時代がある」ことをテーマにした V&A Museum of Childhood という分館がありました（2023 年に Young V&A としてリニューアル）。そこには合唱する人、演奏する人、それを見てカフェでおしゃべりする人、お散歩する人、またベビーカーを押したお子さん連れの方も多く、今まで美術館にはなかった光景がありました。
様々な年齢の方が自分たちの言葉で語っている姿があり、とても新鮮でうらやましいな、と思い感銘を受けました。

「美術館に来たことのない人たちを想像する」

【第一部】のお話の中で、「活動を変えていく」というお話がありましたが、森美術館でも「パブリック・プログラム」から「ラーニング」に変えていくことになりました。どうやったらそもそも美術館に来たことのない人たちに来てもらうことができるか、美術館に来たことがない人たちを想像することから始め、美術館と来館者の関係性を今一度考えました。
そして、聞こえない・聞こえにくい方のため手話ツアー、見えない・見えにくい方のための耳でみるアートなどのプログラムは、その実施内容を対象者にあわせて双方向の対話が生まれるように内容を見なおしました。

また、様々な年齢の方がいつもと違うコミュニティを作るプログラムを作りたいと考えました。美術館でいつものネットワークと違う人たちが観ているものと出会ったとき、どのような交流が生まれるか、そんな場を企画したいと思いました。
今まで美術館で行ってきた企画の中で、実は排除されてしまっている人たちがいるんじゃないか、ということを念頭におき、まだ来館したことのない人たちに目を向けました。
わたしたちがまず行ったのは、見えない方、見えにくい方たちが作品をどう感じているのか、その方たちを主人公にし、その立場になって美術館を変えていくことを行いました。アーティストや、さまざまな分野の方、視覚障がいがあるご家族がいる料理人の方、行政関係者の方など、いろいろな方にアドバイザーになっていただきました。そして、見えない方、見えにくい方にとって六本木の街はどんな街なのか、コミュニケーションはどのようなかたちになるのだろう、どうしたら安全に過ごしてもらえるのか、それからそもそも見えない・見えにくい方にとってのアートとは何か、そんなことを相談しながらワークショップを作っていきました。
まずは六本木の街をいっしょに歩いてみました。そして「このシナモンロールのお店のにおい」「ここにはお花屋さんのお花のにおい」「コーヒーのにおい」、また商業施設内を流れる水の音など、においや音が地図代わりになることがわかりました。わたしたちが当たり前だと思っていることの世界が実はそうではない、ということに気づき、その結果に基づいてどのようなアプローチができるのかを考え様々な視点でディスカッションしました。

「コミュニケーションこそが、“ラーニング”につながる」

またさまざまな年代の方を対象にしたワークショップを開催しました。
シニアプログラムを行った際は、「シニア」と限定されてしまうと手を挙げにくい、というお声をいただき、以来「ご自身がシニア世代と認識されている方」と表現することに変えたところ、30 代の方を含む多くの方に集まっていただくことができました。
「ベビーカーツアー」なども行い、ご家族みなさんで展覧会を鑑賞いただき対話をする、ということも行っています。やはり「美術館に小さい子を連れて来にくい」という方がたくさんいらっしゃいました。それを変えるために「ファミリーアワー」というプログラムにし、子どもたちを主役と捉え、そのご家族との関係性を大事にできる美術館にしたいと考えました。
そして鑑賞いただいたあとは、必ず共有の時間を設けることとしました。そこでは、だれがスタッフでだれがお客さんかわからないくらい闊達なディスカッションが生まれていました。
「この作品を観てください」と一方通行にお伝えするのではなく、「皆さんの日常の中にアートがどんな風に反映されていますか？それを聞かせてください」というコミュニケーションこそが、「ラーニング」につながると考えます。

「自分とはちがう感じ方の人もいるんだということを共有する時間が大切」

そして今年、「ワールド・クラスルーム」という展覧会を行いました。これは学校教育の中にある国語・算数・理科・社会にはすべてアートが総合的な領域として通底するのではないか、ということがテーマです。
たとえば「社会」のセッションの中で、カンボジアのアーティストの写真作品を展示しました。池のように見えますが実はこれはベトナム戦争中に爆撃された跡に水が溜まっている様子を撮影したものです。
子どもたちに、「みんなスマホで写真撮る？」「どんな時に撮りたくなる？」「その写真はだれかに見せたいと思う？」ということからスタートし、作品の前で順を追って対話をしながら鑑賞していくと、「この写真には人は写っていなくてさみしい感じがする」など様々な感想が出てきます。

このように「いっしょに観ている」「自分の言葉を発していいんだ」「自分とはちがう感じ方の人もいるんだ」ということを共有する時間を大切にしています。

美術館として展覧会を作るキュレーターの想いを聴きながら、わたしはラーニングキュレーターとしてそれをどういう風に共有していくことができるのかを考えてプログラムを作ります。そして「誰もが美術館に来る権利がある」ということを大切にしています。

本日ご紹介しました 20 年間のプログラム参加者の方々の声を「現代アートと出会って」として 7 組の方たちにインタビューした動画があります。それぞれのプログラムの詳細が語られていますのでよろしければぜひご覧ください。

「現代アートと出会って：森美術館ラーニング・プログラム参加者の声（森美術館 YouTube）」
https://www.youtube.com/playlist?list=PL6SMu12UXGpz3pw2swhH5dvuUXOMgU_iR

また「美術館をつなぐ」ということも行っています。熊本県の坂本善三美術館では、九州の水害、熊本の大地震があり、それでも当時たった一人の学芸員で展覧会企画のすべてを担当されていました。そこで、美術館同士をオンラインでつないでどういうことができるかを考えました。そして宮崎のコンテンポラリー・ダンスグループや京都の美術家に協力いただき、東京・熊本・宮崎・京都をオンラインでつなぎプログラムを行いました。

今後、鳥取県立美術館とも何かのかたちでつながることができればと思っています。

「美術館から遠い人を作ってはいけない」

（尾崎）とても興味深いお話でした。

わたしも鳥取県立美術館が開館するにあたり、教育普及というテーマが重要でありそれは人が大事と考えています。

また、ボランティアの皆さまのご協力や、いろいろな立場の方のための展覧会というのも非常に重要と考えます。

それぞれを考えるにあたり一方では「美術館と関係を持ちたいが、どうしたらいいかわからない」、また一方では美術館側が「どういう人が美術館に来れないのか」を考え対策すべきと思います。

お話にあった「美術館から遠い人を作ってはいけない」「美術館に来ない人を想像する」ということはとても大切だと思いました。

今まで美術館に来ることができなかった人や、自分は関係ないと思っていらっしゃる方々にお越しいただくことは美術の間口が広がり、わたしたちにとっても励みになると考えます。

今日ぜひ白木さんにお聞きしたいことがあります。一般的に現代美術の作品はわかりにくいと言われていますが、その現代美術が専門の美術館が、あえてラーニングという言葉を使うことによる親和性について教えていただきたいと思います。

さらに、エデュケーションという言葉も昨今よく使われますが、なぜエデュケーションではなくラーニングなのか、ということについてもお聞かせいただきたいです。

「どう作品に近づくか、自分の経験を重ねるための場所でもある、ということが美術館でのラーニング」

(白木さん)わたしたちは、約 3 年かけて森美術館全スタッフの想いの聞き取りを行いました。その中で、学芸員たちは、アーティストの提案の内容を見て、展覧会を作り、「この作品はこうだ」とか、「わたしたちの作品を観なさい」という紹介がとても一方通行であると考えていました。

そうではなく、アーティストの住む現地に赴き、その作品に先に出会った立場として、「この国のこの地域にこんなアーティストがいる」ということ、その国や地域の歴史について、またそのアーティストが抱えていることを検証するという視点を持ち、それを共有する方法が「ラーニング」であると考えました。

その展覧会を作る美術館スタッフも、それをご覧になるお客様にとっても同様であるという想いです。そしてそれは今もなお問い続ける必要があると思っています。

現代アートについて、気を付けなければいけないと常々考えていることがあります。現代アートは本当に様々な手法と表現がありますが、ある人にとっては、そのアートに出会うことで、それが思い出したくない経験を思い出させてしまうことにつながる場合もあると思います。

そのアーティストがどういう想いを持っているのか、自分の経験がその作品のどこに隠されているのか、何に気がつくか、どう作品に近づくか、自分の経験を重ねるための場所でもある、ということがラーニングを考える時に大事であり、醍醐味でもあり、危険性にもなるということを忘れてはいけないと思っています。

「アートの場で対話することがわたしたちの勉強になり、勉強した人が増えれば理解する人が増える、そして社会が変わっていく、美術館とはそういうことがやりやすい場」

(佐藤)「ワールド・クラスルーム」を観に行った際、この姿をぜひ鳥取にも、という光景がありました。

それは「理科」のセッションの映像作品を保護者の方と幼児が食い入るように長時間見ている姿に出会った時です。

今日、白木さんから 20 年間の森美術館での取組をお聞きし、積み上げてこられたことの結果としての姿だったのだな、ととても納得しました。

また、美術館に来られない人を対象としたプログラムもすごく深いと思いました。

わたしは最近トゥレット症候群の方について知りました。電車の中や職場で声を出したくないと思っていても声が出てしまったりするそうです。そのような方々にとっては美術館のような静かにしなければいけないと思われる場所は「来られない場所」になってしまう。

「いつ、どんなふうに開催するのがその方々にとって最善なのか」を考えたり、その方々とアートの場で対話したりすることがわたしたちの勉強になります。勉強した人が増えれば理解する人が増える、そして社会が変わっていく。美術館とはそういうことがやりやすい場なのかもしれないと思います。いつも何ができるか、こんなこともできるだろうかなどと考えています。

(白木さん)「何ができるんだろう」「この先に何かが生まれるといいな」と常に考え続けることをすでにやっていらっしゃると思います。

その時に、専門性を持った方や、当事者の方もそうですが、美術館の仲間づくりも大事だと思います。

第一部でお話しのあった、たくさんの素敵な仲間がすでにいらっしゃるのでこれから楽しみですね。

「美術館は社会の中で特別なものなのではない」

「鳥取県立美術館が開館に向けて目指すべきものは何と考えられますか？」

（白木さん）わたしたちも 20 年間やり続けていますが、やはりまだ出会えていない方はいらっしゃいます。
1 回来て、そこから来ていない方もいらっしゃると思います。
イギリスの TATE のラーニング・プログラムを見た時に、今でも心の拠り所にしていることなのですが、「美術館は社会の中で特別なものなのではない。美術館ではなく映画やライブを選んだとしても、それは当たり前であり尊重すべき。おいしいものを食べたい、おしゃれをしたい、その想いと美術館は並列なのだ。その時に何ができるかもう一度振り返ってみたときに、見えてくるのではないか。」ということをおっしゃっていました。変化し続けることが大事なのだな、と思いました。

「違いがあるということを認めないと美術館は成立しない」

（尾﨑）ラーニングと体験の変化についてもう少し詳しく教えてください。

（白木さん）体験の変化は、それぞれお一人お一人の中に生まれるものだと思います。一緒に体験しても決して同じように作品を捉えるということはないと思います。その違いがあるということを認めないと美術館は成立しないため、プログラムを企画するときに気をつけています。
「皆さんを代表して感想を言ってください」などというのはよくないと考えます。
「あの作品は気に入らない」ということも大事にできるプログラムを作ることがラーニングと思っています。

（尾﨑）美術館というものは展覧会の体験を作ることが重要と考え、変化を作っていく、新しい価値を認めていく、そういう場所として新しい美術館が機能していけばいいと思います。
（佐藤）見えやすい所にいる人だけではなく、遠くにいる人にみんなで心を配れる美術館にしたいと思います。

質疑応答では、経験値の異なる相手に対する見せ方の工夫や問題提起の仕方についての質問や、ラーニング・プログラムの参加者の専門性について質問をいただきました。

当日のアンケートより
・今後どのような方を対象にしていくのか考えているものがあれば知りたい（赤ちゃん・その親、小学生など以外で）
・新しい美術館への期待と関心が上がった
・熱意を感じるよい会だった　森美術館の取組みも聞けてよかった
・エデュケーションからラーニングへと移り変わる源流をわかりやすく学ぶことができうれしかった
・公共施設の本来の在り方を感じてよかった
・憩いの場、同意見です　自分も同じような構想を持って活動している　これからも協力できることがあれば参加させてもらいたい

今回のイベントではまずはじめに、もしも会場内でお子様が泣かれても、皆さまにご理解いただくようお願いしました。
また、小さなお子様連れの方にも気兼ねなくご参加いただけるよう、託児スペース・授乳スペースや、キッズスペースとして木のおもちゃコーナーなどを設置いたしました。

キッズスペースでは、モニターで講演会場の模様をご視聴いただけるようにし、開演中の会場とキッズスペースの出入りは自由にできることをご案内し開催いたしました。
皆さま、ご協力いただき誠にありがとうございました。

これから開館する美術館が、みなさんにとってどのような場所になるか
ぜひ、いっしょにつくりましょう　みんなの体験や記憶をのせて